退職のご挨拶

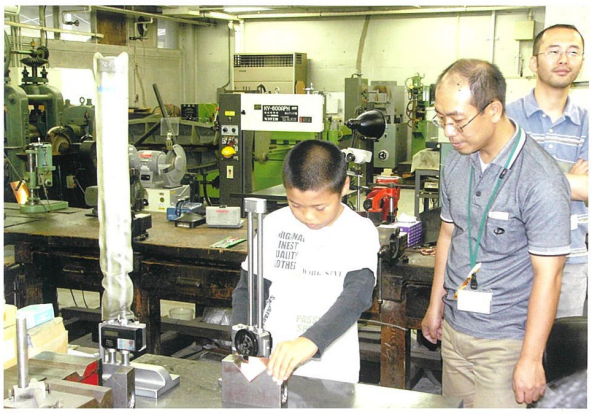
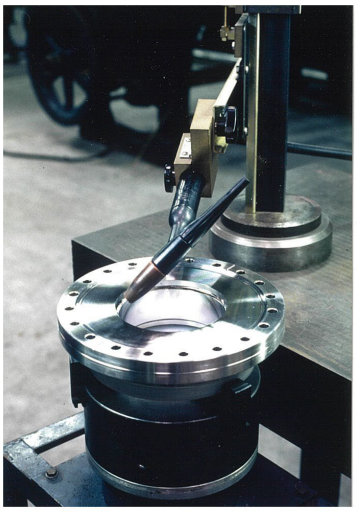
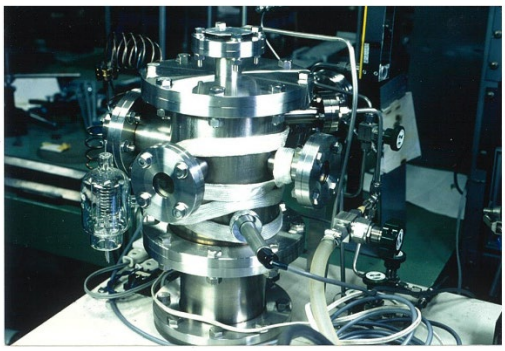
二人の先輩に学んだ「考える力」

大西　政義

私が採用され、配属された試作工場には、対照的な二人の先輩がいました。一人は、常に論文やデータに基づき、論理的なアプローチで問題解決を図る研究者肌の先輩でした。また、もう一人は、長年の経験と勘を頼りに、実践の中で培った技術で道を切り開く職人肌の先輩でした。

配属当初、私はそれぞれの指導法に戸惑うばかりでした。 研究職肌の先輩からは「その部品はどんなところで使用され、そのために必要なことは何か？」と問われ、職人肌の先輩からは「先輩たちの仕事を見て盗め、肌で感じていけるところまで行け」と言われました。最初は、どちらか一方のやり方に合わせるべきかと悩みました。

しかし、ある時、それぞれの指導が複雑な問題を多角的に捉える視点を与えてくれていることに気づきました。与えられた図面だけでは見えない現場の感覚や、経験だけでは気づかない論理的な裏付けがあることに。 二人の教えが交差する中で、私は初めて「自分なりの最適解」を模索するようになりました。

そのおかげで、課題に直面した際、まず論理的思考で仮説を立て、その後、現場での試行錯誤を通じて検証する、という自分なりのアプローチが確立されました。二人の先輩から受けた異なる指導こそが、私を「自ら考え、行動する」技術職員へと成長させてくれたのだと実感しています。

私は、退職後に新たな道へ進みますが、これから技術職員の道を歩む次世代の方たちへ、自分自身の技術スキルの担保とホスピタリティの心で研究支援していただくことを願ってやみません。